

第三章—詩誌—

北方



郡山市役所庁舎（現福島県郡山合同庁舎）を背に

三谷晃一（当時郡商四年在学中）と太田博が中心となり昭和十三年十一月に編集発刊した手書きの詩誌。ペンネーム「谷玲之介」はこの時代から始まったと思われる。1〜3号まで発行されたが、その後中断された。この時太田は郡商を卒業して郡山商業銀行（現東邦銀行）に勤務を始めた年であった。

三谷晃一は太田の二級後輩で、郡商在学時代からともに詩誌「蒼空」「蠟人形」の同人として詩作に励んでいた。自身も応召を受け戦後復員してから太田の死を知り、自分の前半生の最大の出来事の一つとして太田との交流を挙げ、かけがえのない詩友が図らずも戦争により失われたと、その早すぎる死と才能を惜しんでいる。

三谷は福島民報社の論説委員長の傍ら詩作を続け、生涯詩人として多くの作品を残している。

新聞社退職後に沖繩の戦跡を訪ねて、ひめゆり平和祈念資料館と摩文仁の丘に祈りを捧げ、太田博のために追悼の文と詩を寄せている。（「偲ぶ記」参照）

（追悼詩より）

暑き日の 摩文仁の丘を 尋ね来て

蒼天仰ぐ 虚しさや

きみの名刻む 礎（いし）の冷たき

【注・「蒼天」は若き日に共に詩作に励んだ詩誌「蒼空」^{あおそら}を、

太田博の面影に重ねて思い描いたものだろうか】

北方 創刊号（昭和十三年十一月）

黒い鳥と小石

谷 玲之介（太田 博）

わたしは礮地いしぢをあるいてゆく

まろやかな蒼い小石を探しながら

いちめんの水がつめたい

たそがれの河原

翳をもたないくろい鳥が穹を翔けてゐる

わたしは礮地をあるいてゆく

小石を入れたふくろは重い

黒い鳥よ

その隙間から

心地よく晴れわたった大空を覗くと

心の隅の心配までが

失くなって仕舞ふ

枝から枝へ渉りあるく風に誘はれて

枯葉がかさかさおと落葉ちる

積り重なった落葉は

ちようど

沙漠の商人が賣りにくる

絨氈のやうだ

小曲

花はな
篋がたみ

をとめのひめしこひのはな

かほりかぐはしはながたみ

そをうけたまふひとやたれ

ひとりのきみにまごころを

さゝげまつらはながたみ

そをうけたまふひといづこ

短歌 雑詠

澁き茶を啜りてあれば其の頃の若き過失にこゝろ疼める

―當直にて―

草積みて憩へる牛を繋ぎたる水揚枯れて秋蘭けにけり

からやかに下駄ならしつゝ洋装の少女過れり眞晝の舗道

(保留)

漂泊の人のみ知れる愁しみを繁華の街に拾ひたるかな

谷 玲之介……待望久しかったわたしたちの小さな

詩誌「北方」は生まれた。メシヤ(救世主)の誕生の夜に穹に
燦やいてゐた《星》のやうに、何といふうれしい光りであらう。
何といふかゞやかしい光であらう。「北方」よ、かつての栄光
の星のやうに、おまへはわたしたちをみちびて《詩の神》の在す
国へみちびくことであらう。